

味を受け継ぎ命を継ぐ

呉市立広小學校 五年 相原 潤

「九月には、おはぎを百個つくらんといいんね。」

夏休み、祖父母の家に集まっておばあちゃん特製のゆであずきたっぷりのかき氷をみんなで食べている時、おばあちゃんが笑って言った。

「ぼくは小さいころからおばあちゃんの手料理をたくさん食べてきた。おばあちゃんの料

理はいつでも本当においしい。特に、おはぎはぼくの大好物の中の一つだ。おはぎは、春のお彼岸生まれのぼくにとって、バースデーケーキより主役だ。大皿いっぱいきれいに並んだ卓球玉位の大きさのおはぎを見ると、「おおお。おいしそう。」

と歓声を上げてしまう。おばあちゃんは、お彼岸以外でも家族が集まる時、おめでたい時にはおはぎを作ってくれる。おはぎを食べている時、必ずお母さんはひいおばあちゃんと

おばちゃんの話をする。

「ひいおばあちゃん、母さんが小さいころ、

おはぎ作るの手伝わせてくれたんよ。味見

が特に上手じゃ。って笑いよったのを思い

出すわ。

と懐かしそうにひいおばあちゃんの話をする

「潤ちゃん、おばちゃんのおはぎ覚えとる。

潤ちゃんのお誕生日に作ってくれてたんよ

お彼岸には、調子が悪い時でもみんなの分

を作って届けてくれてたんよ。

と少し寂しそうに話をする。ひいおばあちゃん

とおばちゃんはぼくのおばあちゃんのお母

さんとお姉さんという事だ。おばあちゃんは

ひいおばあちゃんとおばあちゃんの味を受け

継ぐ。なんだか寂しいけど、受け継ぐってか

？こい。とぼくは思った。おばあちゃん

ひいおばあちゃんやおばあちゃんにおはぎを

お供えする。おばあちゃんは、

「形は違うけど、味は同じよ。食べんさい。

と手を合わせる。ぼくは、おばあちゃんが三

角布をかぶって、ふかふかに炊き上がったお米をいっばいの湯気の中、木の棒でトントンつく姿を、お仏だんの上で優しくほほ笑む二人の姿に置きかえて想像した。おばあちゃんはいつも笑顔で言う。

「食べてくれる人のことを考えながら作るんですよ。それならおいしくなるし、楽しいんですよ。ぼくは会うことはできなかつたひいおばあちゃん、ぼくが小さいころに天国に行ってしまったおばあちゃんも、きつとおばあちゃんと同じように食べさせたい人のことを考えて、優しい笑顔でおはぎを作ってくれていたんだろうな。と思う。もう今は会うことはできないけれど、おばあちゃんのおはぎの味と一緒にずつとぼくたち家族の心の中で生き続ける。ぼくにできる、味を受け継ぐこと。それはみんなでおいしく楽しくいただくこと位しかできないけれど、毎日の食事に感謝し、毎日笑顔でおいしくいただきたい。」

「おばあちゃん、今日もごちそう様。」